

## 都会で見られる海浜植物と鳥

米澤理雄（船橋市）

日 時：2018年10月24日（水）10～16時 天気：晴れ

場 所：葛西臨海公園（江戸川区）

講 師：多田 多恵子氏（理学博士）

参加者：指導員 29名、担当指導員：米澤理雄、前田悦子

心配されていた天気は晴れとなり、観察日和となった。10時より多田先生を紹介し、観察会はスタート。海浜まで公園内の植物を、海浜は西から東へと観察して行く。目についた植物をなぜ？ どうして？ と問いかけ、ナゾについて解説していく。精力的な先生の話は最後まで皆さんを引き付け、植物のたくましい生命力を感じられた研修会でした。

参加した方の感想を聞きました。

1) 葉を引っ張ると矢筈形にちぎれる事からヤハズソウ、若い人には分からないので、初心者マークと説明する。塩害で葉は枯れ、枝がむき出しになっているクスノキ、ドマティア（ダニ部屋）の興味深い話を伺う。おとなしい羊を飼っている説。異論も多く、現在研究中とか。ウラギクはディズニールランドができる前の浦安の浜に、大群落があったのを先生は見ているそうです。干潟が減り、今は絶滅危惧種になり、千葉県では盤洲干潟で見られる。ホソバハマアカザ、葉の表面に粒々の粉が噴き出て、舐めると塩味。塩を排出する塩類腺があるそうだ。周りにはイソヤマテンツキ、ウシオツメクサ、ハマスゲ、コウボウシバ、イワダレソウ、ホウキギク、かわいい小ガニ、などが見られた。

砂地に匍匐ホフクするハマゴウ、果実は芳香があり、平安時代の貴族は枕に入れて楽しんだ。落葉低木との事だが、木本だと分かる、茎の直径 10 cmはあるハマゴウがあった。シソ科で茎は 4稜。イソギクは千葉県から静岡県の地域性植物。ハマギクはキク科ハマギク属の日本固有種。属名、種小名にも nippon が含まれる。青森県から茨城県にかけての太平洋海岸に自生する。ハマゴウは東京湾を北限とする落葉低木、たくさん植えられている。黄色のハイビスカス、花の時期に訪れたい。他にもハマビワ、ハマベノキ、タンキリマメ等、いろいろ教わる。海浜植物の日差しの強さには葉を厚くシクチクラ層を発達させ、風対策には背を低くし、根をしっかりと張り、耐乾・耐塩対策を身につけて生きている姿に感動を覚えました。空にはアキアカネがいっぱい飛び交い、最後にはノスリの精悍な姿も見ることができました。（林）

2) ①多田多恵子先生から直接、植物の不思議を生き生きと楽しい表現で伺う事が出来たのが、とにかく嬉しかった。（木の実は少しづつ熟した方が美味しく、遠くまで運んでもらえる「ちょっとだけよの法則など。」クロガネモチの実で）

②台風の塩風害でタイムリーなサイトだったと思えました。

③野生化した海際のハマゴウの小ぶりで青々した姿に本来の自然の強さを実感しました。

④ホソバハマアカザの葉をかじると塩味が程よく美味しい。（アフリカなどの塩害地域用に研究が進められているとの事。現実の厳しさと頼もしさも感じました）（西河内）



クスノキのダニ部屋の話 | ハマゴウの実の匂いを嗅ぐ 匂い袋の香りです